

日時：2019年12月4日 18:00～19:30

会場：東京外国語大学 語学研究所

言語教育フォーラム《読解の教育》「ペルシア語読解教育のケース」

報告者：吉枝聡子（東京外国語大学総合国際学研究院 / イラン諸語研究）

YOSHIE Satoko

本発表では、まず東京外大における専攻言語ペルシア語の授業カリキュラムと読解の授業の位置づけについて概観したうえで、1・2年次を中心とした読解の授業の現状と、大学の専攻言語として読解授業を行ううえでの問題点について、以下の点を中心に報告した。

1. 1・2年次における読解の授業について

読解テキストには、1年次秋学期では初等教科書レベル、2年次では中等から高校生向け、あるいは同レベルの一般書や、比較的平易な新聞記事を用いている。

2年次以降は、テキスト講読の際に、ペルシア語—ペルシア語辞書やその他の参照文献・サイトを積極的に活用するように伝えている。このため、2年次の春学期授業初回には、オンライン辞書や参照サイトを含む、辞書・辞典・事典類等の基本参照文献類の使い方について紹介している。授業内では毎回扱う範囲を決めておき、語釈に加えて周辺的な事項を調べておくことを前提とする。

2. リーダー教材について

ペルシア語については、日本国内では使用可能なリーダー教材は出版されていないのが現状である。イランでは近年CEFR準拠のペルシア語学習テキストが出版されるようになってきてはいるが、大学の専攻語としての授業で扱うには内容が物足りないこと、CEFR基準とペルシア語レベルの対応表が未入手であること、テキスト中の音声表記やエザージェ表記が過分に付けられているなど、授業で使用する際には問題がある。

□参考文献

吉枝聡子(2011)『ペルシア語文法ハンドブック』白水社

Bonyād-e Sa'di, *Lezzat-e Khāndan (Enjoy Reading)*, Enterhārāt-e Fātemi, 2016.

—— *Irānshenāsi (Iranology)*, Enterhārāt-e Fātemi, 2016.